コリント式柱頭に関する議論

フランス王立建築アカデミー(1671-1793)に関する研究 その3

DISCUSSIONS ON THE CORINTHIAN CAPITAL

A study on the French *Académie Royale d'Architecture* (1671-1793) Part 3

土居 義 岳*

Yoshitake DOI

As for the Corinthian capital, the Academy discussed especially the total height of the capital and the proportion of heights of the three layers under the abacus.

For the total height, Vitruvius' 2 modules was denied, and 2 modules 1/3, the measurement formulated in the Italian Renaissance, was admitted. But, taking the case of the pilaster into consideration, the Academy permitted a greater height, 2 modules 2/3.

For the proportion of the three layers, in the first period(1671-1715), the Academy denied that of Vitruvius and admired that of the Corinthian capital of the Pantheon or the Temple of Castor. But in the second period(1734-1750), Tanevot proposed his original proportion that was different from the former two proportions.

Keywords: *Académie Royale d'Architecture, Corinthian order, capital, Vitruvius, Claude Perrault, Antoine Desgodetz*
フランス王立建築アカデミー、コリント式オーダー、柱頭、
ウィトルウィウス、クロード・ペロー、アントワヌ・デゴデ

1. 序

フランスの王立建築アカデミーでは、その毎週の会合において、理想的な建築オーダー体系を確立することを目的とした議論がなされた。そこでは、第1期(1671~1715)¹⁾ においては古代ローマ建築が模範とされたが、第2期(1734~1750)においては17世紀のフランス古典主義の建築が尊重された²⁾ という一般的傾向が見られる。こうした傾向はエンタブラチュア/コラムの高さ比やドリス式ペア・コラムに関する議論において顕著であった³⁾。

こうした全体的な枠組みとアカデミーの全般的な態度の変化のなかで、コリント式柱頭も議論されたわけであるが、具体的な論点としては、柱頭全体の高さ、垂直方向の比例、という2点があった。

ここで垂直方向の比例とは、下部の2段の葉飾り、その上の渦巻きのある段、そして最上部のアバクス、の合計4段のそれぞれの高さの比である。本論では便宜上、

アバクスはその名前で呼び、その下の3段を下から順番に第1段、第2段、第3段と呼ぶことにする。

本稿では、アカデミーの全体的なパラダイムの変化を念頭においた上で、こうしたコリント式柱頭の比例に関する議論を追ってゆくが、そこには下記のような大まかな流れがあることをまず結論先取的に指摘したい。

すなわち第1期では、ウィトルウィウスの記述が疑問視され、ある側面ではイタリア・ルネサンスで確立されたバラディオラの定式が採用され、別の側面ではローマの古代建築の実例に依拠した比例が是認されたが、とりわけローマのカストルとポルクスの神殿⁴⁾ (以下、カストル神殿)のコリント式オーダーの柱頭と、パンテオンのそれが頻繁に言及された。第2期にはやはり17世紀のフランス古典主義建築の実例に基づく比例が是認された。またコリント式柱頭に固有の事情もあり、ピラスターの柱頭である場合は比例も異なるという問題が関連している。

* 九州芸術工科大学 環境設計学科 助教授・
工博

Assoc. Prof., Dept. of Environmental Design, Kyushu Institute of
Design, Dr. Eng.

2. コリント式柱頭全体の高さ

2. 1 ウィトルウィウスのテキストの検証

柱頭の全高に関してアカデミーは、ウィトルウィウスの記述には同意せず、むしろパラディオらのイタリア・ルネサンスの建築家たちが採用した値をより好んだ。

ウィトルウィウスはその『建築十書』第IV書の第I章において「アバクスを含む柱頭は、柱の下部の太さと同じだけの高さをもたねばならない」と述べている⁵⁾。つまり柱頭全体の高さは、柱の下部直径、すなわち2モデュール（以下 M）でなければならない（図1）。

アルベルティもその『建築論』第七書の第八章でやはり「コリント式の柱頭の高さは円柱下端半径の二倍とする⁶⁾」と述べている。

しかし16世紀以降になるとパラディオ、ヴィニョーラ、スカモッツィらは皆、アバクスの高さは $1/3 M$ 、その他の部分が $2 M$ で、合計 $2 M 1/3$ の高さを与えている。これはウィトルウィウスの $2 M$ という値よりも大きい。（図8～10）

16世紀フランスではフィリベール・ドロルム⁷⁾ が『建築第I巻 Le Premier Tome de l'Architecture』（1567）の第VI書第III章において、アバクスの高さが「直径の6分の1」であり、その下の部分の高さは「円柱下端直径と等しい」値でありかつ「3等分される」と述べている⁸⁾。すなわち彼もやはり $2 M 1/3$ という値を与えた。（図11）

17世紀フランスでは、フレアール・ド・シャンブレ⁹⁾ が『古代建築と近代建築の比較 Parallèle de l'architecture antique et de la moderne』（1650）のなかで、パンテオンのポーチコの柱頭が最も美しい例であり、その高さは70パルティ（ $=2 M 1/3$ 、なお1パルティ $=1/30 M$ 、以下 P）であるとしている¹⁰⁾。またアブラム・ボス¹¹⁾ は『古代建築のオーダー作図法論 Traité des manières de dessiner les ordres de l'architecture antique...』（1664）のなかでは71 P から71 P $1/2$ という、70 P を僅かに上回る値を与えている¹²⁾。

クロード・ペロー¹³⁾ は、おそらくこうした相違を意識して、ウィトルウィウスの比例と、彼以降に考案された比例とを比較し検証した。彼はその翻訳『ウィトルウィウス建築十書 Les Dix Livres de Vitruve』（初版1673年）のための挿図において、ウィトルウィウスの記述に従って復元した柱頭と、ローマのパンテオンのポーチコのそれを比較して論じている（図1）。彼は、前者の柱頭は全体の高さが $2 M$ であるが、後者のそれはアバクスを除いた高さが $2 M$ である、と述べている¹⁴⁾。

ただ1682年に出版されたアントワーヌ・デゴデ¹⁵⁾ の『ローマの古代建築 Les Edifices Antiques de Rome』（1682）の図VIIIによれば、そのパンテオンのポーチコの柱頭は、アバクスの高さが8 P、その他が59 P $3/4$

であり、アバクス以外が正確に $2 M$ というわけではない（図5）。また、後述するように、柱頭の4段の垂直方向の比例も異なっている。もっともデゴデが実測図面を携えてローマから戻ったのは1677年だから、当然、ペローが参照したのはむしろフレアール・ド・シャンブレらの文献である。しかしいずれにせよこの挿図とその解説においてペローは、是非は云々していないものの、ウィトルウィウスの記述と彼以降の古代の実例が異なっていることは指摘している。

1675年5月5日の会合でアカデミーは、ペロー訳『建築十書』のまさにその第IV書の第I章を講読した結果、次のように指摘した。すなわち、ウィトルウィウスの記述は間違っているとした近代の建築家もいるが、古代ローマの遺跡のなかには彼の記述に合致する例もあるから、ウィトルウィウスの教義は古代ギリシャ人のものであって、そのギリシャ人の教義が後に変更されたのであろう、と¹⁶⁾。実際、ティヴォリのウェスタ神殿の柱頭のように高さが $2 M$ 弱のものもある（図3）。ここではアカデミーはまだ、ウィトルウィウスと古代の実例との乖離は認めつつも、古代ギリシャの名においてウィトルウィウスを擁護する立場であった。

アカデミー初代理事にして教授であったフランソワ・ブロンデル¹⁷⁾ はその講義録『建築教程 Cours d'architecture』第II部（1683）の第I書において類似の見解を示した。すなわち、柱頭全体の高さを $2 M$ とするウィトルウィウスの方法はギリシャ人の慣用であったと信じるが、そうした例はまだ見たことがなく、その高さだと葉飾り等のために十分なスペースをとることが不可能になるので、「こうした方法は決して模倣されるべきでない」のであって、望ましい寸法はアバクスが $1/3 M$ 、その他の部分が $2 M$ 、全体で $2 M 1/3$ であり、古代の実例にはそれに近い寸法が多いとし、例としてローマのカストル神殿、パンテオンのポーチコ等のコリント式柱頭を列挙した¹⁸⁾。またブロンデルは同書の別の箇所でも、ペローと同様に全高が $2 M$ しかない柱頭と $2 M 1/3$ のその比較を行なっている¹⁹⁾（図2）。

そのペローは『古代人の手法に基づくコラムの五つのオーダーのオルドナンス Ordonnance des cinq espèces de colonnes selon la méthode des Anciens』（1683）において「コラム下端の直径全体の大きさにその6分の1を加えて」柱頭の高さとする²⁰⁾と述べているが、この値はパラディオらが採用した $2 M 1/3$ と同じである²⁰⁾。

1693年2月3日以来、アカデミーはジャン・ビュラン²¹⁾ の『コラムの5種類の様式に関する建築の一般法則 Règle générale d'architecture des cinq Manières de colonnes, a sçavoir Tuscanes, Doriques..., livre enrichi de plusieurs autres à l'exemple de l'antique』（1654）を講読したが、同年3月2日の会合ではそのビュ

ランによるコリント式柱頭の図版が議論され、ピュランはウィトルウィウスに従って柱頭全体の高さを2 M としていることが確認され、その際、ウィトルウィウスのテキストの解釈に関する重要な指摘がなされた。

「しかし他の人々の解釈によればウィトルウィウスのこの文章は改竄されたものであり、アバクスを含めず、という風に読まなければならない。実際それは古代の作品や、近代の作品や、ヴィニョーラ、バラディオ、スカモッツィやその他の最も著名な作家の作品においてなされていることである²²⁾」

すなわち高い柱頭が望ましいという観点は変らないが、問題の表現の仕方が変わり、2 M という高さに頂上のアバクスを含めるかどうか、が議論の対象となった。

1696年10月29日の会合でアカデミーは、ブロンデルの『建築教程』第II部第I書のうちの、まさにブロンデルがコリント式柱頭の高さを問題にしてウィトルウィウスを批判した箇所を講読した。アカデミーはやはりここでもアバクスを2 M という高さに含めるか含めないかという問題設定をしたのち、以下のように決定した。

「... ウィトルウィウスのテキストを検討した結果、この著者はアバクスをその柱頭の高さに含めたのであるが、古代にはその顕著な実例はなく、それは決して実行されてはならないと考えた²³⁾」

1706年5月10日の会合では、ピュランによる高さ 60 P の柱頭とドロルムによる高さ 70 P の柱頭を比較したフレアール・ド・シャンブレの『古代建築と近代建築の比較』(1650)の第XXXV章²⁴⁾が検討され、ドロルムの比例の方が「よき趣味に適っている」とされた²⁵⁾。1706年8月30日の会合でも、ウィトルウィウスやジャン・ピュランの柱頭が検討されたが、アカデミーはやはりこの2 M という高さにはアバクスは含まれないこと、そのほうが「道理にかなって」おり、古代の建築にも類例が多いことを重ねて指摘している²⁶⁾。

以上からアカデミーはウィトルウィウスよりも古代の実例に従って、より高さの大きい柱頭を好んだことが判明する。

実際、その主張に呼応するように、2代目教授フィリップ・ド・ラ・イール²⁷⁾も3代目教授デゴデもその講義録においては柱頭の高さを70 P すなわち2 M 1/3 にしている(図12~14)。

一時期この問題は、ウィトルウィウスの定めた2 M という高さにアバクスが含まれるか含まれないかというふうに定式化された。議事録やどの講義録においてもこうした形で問題設定がなされた理由そのものに触れた箇所はない。おそらくこうした議論が現われたのは、ウィトルウィウスの記述の正当性をできるだけ傷つけないようにと、一時期、アカデミーが配慮したからであると考

えられる²⁸⁾。

2. 2 ピラスターの問題

同種のオーダーであっても、直径が減衰しないピラスターの場合は、上部直径が下部直径の通常は5/6程度であるコラムの場合とは、特に水平方向の比例が異なってくるのは当然である。特にコラムとピラスターが隣り合う場合はその差が視覚的に容易に感じられるわけであり、そこで特別の調整が必要とされる。

このピラスターの場合の問題は、第1期にすでに言及されているが、第2期においてより重要な問題となった。この時期においては、少なくとも議事録やタヌヴォーの図面に関する限りは、コリント式柱頭の高さはピラスター、あるいはそれとコラムの併用という文脈でのみ議論されたからである。

垂直方向の比例に関係がない場合でも、それは重要な問題であった。例えば1692年11月17日と24日の会合では、パンテオンのピラスターの柱頭の細部とコラムのそれとが比較されている²⁹⁾。1707年8月8日の会合では、コラムと隣り合わないピラスターに関しては「ピラスターの幅を若干緩和」してもよいことを確認している³⁰⁾。すなわちコラムとピラスターを隣り合わせる場合は、ピラスターの上部直径と柱頭の横幅を、コラムのそれにあわせて小さくしなければならない、という命題が存在したことが暗に示されている。

次の1707年8月17日の会合では今度は高さが問題とされ、ピラスターの場合は幅が広いからその分だけ柱頭の高さを大きくしなければならないとして、以下のように明確な数値を与えた。

「... その結果、もしコラム上端の直径が通常そうされるように1/6だけ細くなるなら、ピラスターの柱頭はコラムの柱頭よりも1/6 Mより高くなければならない。そしてその結果、コラムの柱頭の高さが1 M 1/6であるなら、ピラスターのそれは1 M 1/3である³¹⁾」

この場合明らかに「1直径=1 M」を前提として述べられており、通常の「1直径=2 M」を前提とすれば、柱頭の高さはコラムの場合が2 M 1/3という通常値、ピラスターの場合が2 M 2/3という大きめの値に換算される。

次の1707年8月22日の会合では、デゴデが提出したルーヴル宮の中庭のコラムの柱頭と、その東側のコロネードのコラムとピラスターの柱頭の図面に基づいて、前回の議論の内容が検証された。アカデミーはここで次のような2つの指摘をしている。

第1に、東側コロネードの柱頭は先週の会合の決定に合致するのであって、コラムの柱頭の高さはピラスター

図1 ベロー訳『ウィトルウィウス建築十書』p.107
(左)「ウィトルウィウスのテキストに基づく」柱頭。
(右) パンテオンのポーチコの柱頭(アバクスを除く
高さが 1M、下部3層の高さはほぼ等しい)。

図2 ブロンデル『建築教程』第I
部第V巻第I章、pl.XVII (左
半分は「ウィトルウィウスに基づく柱
頭」、右半分はその他の例)

図3 ティヴォリのウェスタ神殿の
柱頭、デゴデ『ローマの古代
建築』p.91, pl.II (部分)。
単位 パルティ(1P=1/30 M)

図4 カストル神殿の柱頭、前掲書
p.129, pl.II (部分)

図5 パンテオンのポーチコの柱
頭、前掲書 p.30, pl.VIII
(部分)

図6 パンテオン内部のコラムの柱
頭、前掲書 p.43, pl.XIV
(部分)

図7 パンテオン内部のピラスター
の柱頭、前掲書 p.47, pl.XVI
(部分、全高は原図では68 1
/2と記載されている)

(注) 図1、2 において; $h+0$ は h よりごく僅かに大きい。

のそれと同じ高さにするために、通常の値よりも大きくなっているという指摘。すなわちアカデミーは、この柱頭の高さは $2 M \frac{2}{3}$ であると認識している。

第2に、しかし、通常の柱頭の高さと前回の会合で決定されたピラスターの柱頭の高さの平均値をとることを提案し、「そうすることでコロネードのコラムの柱頭の高さに見られるような過剰を免れよう」と結論づけたこと³²⁾。すなわちピラスターの場合は柱頭を高くすべきことを認めた上で、ピラスターとコラムが隣り合う場合を考慮して、通常値と前回の会合で決定された値の平均値をとるべきであるとした。議事録には具体的な数値は与えられていないが、理論的には以下の値になる。

$$(2 M \frac{1}{3} + 2 M \frac{2}{3}) \times \frac{1}{2} = 2 M \frac{1}{2}$$

しかしデゴデはその講義録『建築オーダー書 Traité des Ordres de l'Architecture』(1717年以降³³⁾)のなかで、ピラスターの柱頭にはやはり $2 M \frac{1}{3}$ (70 P) という通常値を与えている³⁴⁾ (図15)。

第2期(1734~1750)になるとミシェル・タヌヴォー³⁵⁾がこの問題に再び着手した。1740年8月29日の会合ではタヌヴォーが「通常値では短すぎてしまうピラスターの柱頭」のための適正な値が与えられたコラム柱頭の図版を提出したが、そこで与えられた高さは、 $2 M \frac{1}{2}$ であって³⁶⁾、これは1707年8月22日の会合の理論的帰結として考えられた値と一致する。

アカデミーは慎重な態度を示し、次の1740年9月5日の会合では、決定は控えることを決めた後、タヌヴォーにルーヴル宮東側のコロネードのコラムとピラスターの「全ての寸法をヴァカンスの間に」実測するように要請した³⁷⁾。

タヌヴォーは翌1741年4月24日の会合でその図版を提出した(図16、24)。その図版に書きこまれた寸法によれば、柱頭の高さは $2 M \frac{1}{2}$ よりも大きく、むしろ $2 M \frac{2}{3}$ に近い値であることが判明する³⁸⁾。

すなわち図24において、右側のコラム下端直径は「3 pi.7 po.」、コラムの柱頭の高さは「4 pi.9 po.」、また左側のピラスターの柱頭の高さは「 $2 M \frac{7}{12}$ 」と書込まれている(ここで、1 pi. (pied ピエ) = 324.8mm、1 po. (pouce プース) = 27.07mm、1 pi.=12 po.、またこの第2期(1734-1750)では $1 M = 12 P$ とする比例体系が採用されていた³⁹⁾)。

従って、コラム直径 = 3 pi.7 po. = 43 po.

ゆえに、 $1 M = \frac{43}{2} po. = 21.5 po.$

コラム柱頭の高さ(実長) = 4 pi. 9 po. = 57 po.

ゆえに、コラム柱頭の柱頭高さ(単位M) = $57 / (21.5) = 2.6511...M$

また、ピラスター柱頭の高さ = 「 $2 M \frac{7}{12}$ 」

= $2 M + (7 P \frac{1}{3}) = 2 M + (22/3) P$

= $2 M + (22/3) / 12 M = 2.6111...M$

従ってコラムとピラスターの場合いずれも $2 M \frac{1}{2}$ (=2.500M)よりは $2 M \frac{2}{3}$ (=2.666...M)に近い値である。

しかしアカデミーはこの時点では明確な結論は出していない。ただ議事録では、この会合までにタヌヴォーが多くのコリント式オーダーの図版を提出しており、ルーヴル宮のコロネードがそれらとの比較のために「絶対的に必要」であるとした、という記述が見られる⁴⁰⁾。これらの図版はフランス学士院の図書館に保管されている(Ms 1026)が、柱頭の高さはコラムであれピラスター

図8 桐敷真次郎編著『パラディ
オ「建築四書」注解』第I巻
第17章、p.99 (部分)
単位 ミント(1m=1/60 直径)

図9 長尾重武『ヴィニョーラ 建
築の5つのオーダー』XXVI章
(部分)
単位 パルティ(1P=1/18 M)

図10 ヲヴィレ訳スカモツツィ『建
築の5つのオーダー』p.120
(部分)
単位 ミント(1min=1/60直径)

図11 ドロルム『建築第I巻』第VI
章第三章、p.180 (部分)

図12 ペロー『…オルダナンス』
pl.V (部分)
単位 パルティ(1P=1/30 M)

図13 ラ・イール『市民建築』
pl.16 (部分)
単位 パルティ(1P=1/30 M)

図14 デゴデ『…建築オーダー書』
ch.VI, 'V.dessain' (部分)
単位 パルティ(1P=1/30 M)

図15 デゴデ前掲書、ch.VI,
'VII.dessain' (部分)
単位 パルティ(1P=1/30 M)

であれ常に $2M \frac{1}{2}$ である⁴¹⁾。

そして1742年8月13日の会合で、タヌヴォーの図版よりもルーヴル宮の柱頭の比例を正当化する判断を、以下のように下した。

「アカデミーは会合を開きコリント式柱頭の最も適切な比例を検討したが、背後にピラスターのある時、その場合は、柱頭の高さに $2M \frac{1}{2}$ と $2P$ を与えることが適切であるという合意に達した。なぜなら、もし高さがそれより小さければピラスターの柱頭は低すぎる事となるだろうから⁴²⁾」

この「 $2M \frac{1}{2}$ と $2P$ 」という値は、第2期の一般的な寸法体系である $<1M=12P>$ で換算すれば $2M \frac{2}{3}$ であり⁴³⁾、ルーヴル宮の柱頭の値に極めて近い。

7年後の1749年6月23日の会合ではルーヴル宮東側のコロネードの柱頭が再び検討された。議事録によれば、まずポフラン⁴⁴⁾ が古今の建築家の大多数はコリント式柱頭の高さを $2M \frac{1}{3}$ としていると指摘したが、アカデミーは、ルーヴル宮コロネードのそれは $2M \frac{2}{3}$ であり、この比例は「上ほど直径が小さくなるわけではないピラスターの場合は優雅に見える」という意見であった⁴⁵⁾。従って、ルーヴル宮の柱頭の高さを是認した先の1742年8月13日の会合での決定が、ピラスターという文脈で考慮された柱頭の高さに関するアカデミーの最終判断であったと考えられる⁴⁶⁾。

3. 柱頭の4段の比例

3.1 ウィトルウィウスの比例の検証

ウィトルウィウスは『建築十書』第IV書の第I章においてコリント式柱頭の垂直方向の寸法を説明しており、まずアバクスは柱頭の高さの $1/7$ であると述べた後、

以下のように続けている。

「アバクスの高さが除かれた後、残りは3分割され、ひとつは下の葉に、他のひとつは第2の葉に、そして同じ寸法が茎 (caulicoles)⁴⁷⁾ にあてられるが、この茎からは別の葉が延びてアバクスを支える⁴⁸⁾」

この文章からは、アバクス下部の3段すべてに同じ高さが与えられるとは断言できない。

しかしイタリア・ルネサンスの建築家たちはそれら3段は同じ高さをもつと解釈したようである。まずアルベルティによれば、柱頭全体の高さが7モジュールに等分されたのち各段は2モジュールずつ与えられるとしているから⁴⁹⁾、各段の高さは等しい。なおこの時、柱頭の4段の比例は $<2:2:2:1>$ である。ヴィニョーラ、パラディオ、スカモツツィもやはり下部の3段のそれぞれに同じ高さを与えている(図8~10)。

もっとも彼らは、前述のように柱頭全体の高さとしてはウィトルウィウスのそれよりも大きい値、すなわち $2M \frac{1}{3}$ (70P) を与えたのであり、アバクスは $1/3M$ (10P)、下部の3段はそれぞれ $2/3M$ (20P) である。おそらく $<2:2:2:1>$ という単純な整数比を守ると同時に、パルティを単位にした時に、各値が単純な整数で表せることが求められたということが推測される。おそらくこれが彼らがウィトルウィウスの値を変更したことの理由の1つであると思われる。

ドロルムは、前述のように、『建築第I巻』第VI書第三章においてコリント式柱頭のアバクスより下の部分は3等分されると述べた(図11)。続いて彼は、第IV章ではパンテオンの室内、第VI章ではそのポーチコ、第VIII書では「3本コラム」の柱頭について論じているが、テ

図16 ルーヴル宮東コロネードのコラム柱頭、タヌヴォー作図、フランス学士院図書館(B.I.F.), Ms.1026, pl.72 (部分)

図17 タヌヴォーによるコリント式オーダー、B.I.F., Ms.1026, pl.61 (部分)
単位 パルティ(1P=1/12 M)

図18 同左、B.I.F., Ms.1026, pl.62 (部分、コラム柱頭)
単位 パルティ(1P=1/12 M)

図19 同左、B.I.F., Ms.1026, pl.62 (部分、ピラスター柱頭)
単位 パルティ(1P=1/12 M)

図20 Laurent Lindet, 1737年度ローマ大賞2等受賞作(部分)
J.-M.Pérouse de Monclos, "Les Prix de Rome", p.41

図21 Jean A.Raymond, 1766年度大賞受賞作(部分);
J.-M.Pérouse de Monclos, op.cit., p.87

図22 A.-J.Gabriel, エコール・ミリテール礼拝堂(部分);
M.Gallet et Y.Boittineau, "Les Gabriel", p.287

図23 J.N.L Durand, "Leçon d'Architecture", 1819, pl.7

(注) 図16、18～22 において; $h+\alpha$: 高さが最大の段、 h : 高さが中間の段、 $h-\alpha$: 高さが最小の段

クスト中における説明と挿図は一致しない。すなわち本文の説明では、後述するような「第3段>第1段>第2段」というデゴデの実測結果と一致するが、挿図ではすべて「第3段=第1段=第2段」となっている⁵⁰⁾。

フレアール・ド・シャンブレが前述の『・・・比較』において示したパンテオンのポーチコの柱頭では、下部3段の高さはほぼ等しく、第3段がごく僅かに大きいのみである⁵¹⁾。

ボスも下部3段には等しい高さを与えている⁵²⁾。

ペローの挿図によれば「ウィトルウィウスに基づく」ものとされる左半分は4段が<2:2:2:1>の比であるが、ローマのパンテオンのポーチコの柱頭によるとされる右半分は、第3段が他の2段よりも僅かに高い(図1)。前述のように、これはデゴデの実測調査ではなく、フレアール・ド・シャンブレの文献に依拠したものであると考えられる。

アカデミーはアバクスの高さが $1/3 M$ (10 P) であるべきという点にはこだわっていたようで、時期は下がるが1693年9月22日の会合では、その高さをコラム下部の直径の $1/7$ すなわち $8 P 4/7$ にしたドロルムを承認せず、直径の $1/6$ (10 P) を与えるのが「一般的法則」であるとした⁵³⁾。

ブロンデルもウィトルウィウスによる柱頭を紹介しながらその高さを矯正する案を提出しているが、この基本比例は守っている⁵⁴⁾ (図2)。

3. 2 古代の比例への言及

ペローが『オルドナンス』において示した柱頭はこうした比例とはやや異なっており、柱頭全体の高さは $2 M 1/3$ であるが、アバクスは薄く、その分だけ第3段の

高さが大きく、第1段や第2段よりも厚くなっている

(図12)。後述するようにこの比例はカストル神殿(図4)のそれに近いが、ウィトルウィウスのとされた比例からは逸脱し、むしろ古代建築の実例に依拠したこの比例に対して、この時はアカデミーは何の反応も示していない。

アカデミー会合の中でこの主題が議論されるのは1680年代の終わりになってやっとであり、デゴデの『ローマの古代建築』(1682)が利用できるようになってからかなり時間がたっている。ブロンデルが<2:2:2:1>というウィトルウィウスに由来するとされた単純な比例を好んでいたため、他のアカデミー会員があえて異なる比例を提出することができなかったことも推測される。

アカデミーがこの柱頭の細部に言及しはじめた時、彼らはウィトルウィウスやパラディオらにはほとんど言及せず、もっぱら古代建築の実例を参照し、第1～第3段に異なる高さを与えた。

この文脈で古代の柱頭が最初に言及されたのは1688年4月13日の会合である。この時フィリップ・ド・ラ・イールがコリント式柱頭における「莖」について言及し、アカデミーはとりわけカストル神殿の柱頭に見られる莖を尊重した⁵⁵⁾ (図4)。ただし比例についてはなにも記録されていない。

1689年8月の19日と26日の会合では、パンテオンの柱頭が議論されたが、カストル神殿のコリント式柱頭のほうが「その美しい比例故に」好ましいという結論に達した⁵⁶⁾、という言及がある。この会合はパンテオンかカストル神殿かという選択肢が与えられた最初の会合である点でも重要である。同時に、神殿の柱頭は3段が必ずしも同じ高さをとらず、特に第3段が他の2段よりも大

図24 タヌヴォーによるルーヴル宮東コロネード実測図；
B.I.F., Ms.1026, pl.72

きいことを考えると、アカデミーが、3段の高さがすべて等しいというウィトルウィウスやパラディオ的な比例に固執しないで、より大胆に古代の実例に注目するようになった最初の例として重要である。

また1692年11月17日と24日の会合では、パンテオンの柱頭の葉飾りの曲線の作図法が議論される⁵⁷⁾ など、古代建築が注目された。

ジャン・ピュランの文献が講読された前述の1693年3月25日の会合では、この3段の比例に関する非常に具体的な言及が見られる。

「コリント式オーダーの柱頭の比例に関しては、莖のある部分の高さは他の2つの部分より大きくなければならないこと、アストラガルに近い部分の葉は、そのアストラガルの張出し故、真中の段の葉よりも高さが大きくなければならないという見解に達した⁵⁸⁾」

すなわち各段の高さは、第3段>第1段>第2段、の順番でなければならず、特に第1段は下から見上げた場合アストラガルによって少し隠されてしまうので、それを補正しなければならないという明確な理由があるとされた訳である。そしてこの比例はパンテオンの柱頭のそれに近く、第1段と第2段が同じ寸法であるカストル神殿の柱頭の比例とは異なっている。前述の1689年8月26日の会合では、パンテオンの柱頭よりカストル神殿のその比例が好ましいと判断されていたわけであるから、アカデミーの見解は変化したわけである。

もっともこれが最終的な判断であったわけではない。1699年2月23日の会合で、ラ・イールはその講義録『市民建築 Architecture Civile』（1690年代）を読み上げて、「ロトンダ」すなわちパンテオンの柱頭と、「カン

ポ・ヴァッキノの3本のコラム」すなわちカストル神殿のそれとの相違を報告した⁵⁹⁾。この報告の内容は議事録には記載されていない。しかしその『市民建築』においては、彼は、カストル神殿の例が最良でありパンテオンの例は次に良いという判断を下している⁶⁰⁾。

また両者の具体的な比例に関しては、ラ・イールは以下のように記述している。

「パンテオンのポーチコと内部の（柱頭の）葉状装飾帯の高さであるが、最初の帯の葉は第2の帯よりも高く、莖は前2者の葉よりも高いが、しかし（カストル神殿の）3本のコラムにおいては葉の2段は同じ高さであるものの、莖はそれらの帯よりも1/3ほど高い⁶¹⁾。」

これはまさにデゴデの実測結果と正確に一致している（図4、5）。

もっともこの会合の議事録を読むかぎりでは、アカデミーがどちらか一方を好ましいとした、という記述はない。しかし少なくともパンテオンとカストル神殿という選択肢があったことは容易に判明する。

そして最終的にはアカデミーはパンテオンの柱頭の比例、すなわち各段の高さが、第3段>第1段>第2段、の順である比例を好んだと推測される。まず1701年4月5日の会合では、デゴデが「アカデミーによって提案された比例に従った」コリント式柱頭の図面を提出している⁶²⁾。1698年にアカデミー会員になったばかりであった彼は、主としてアカデミーの指示にしたがって図面を作成して会合に提出するという役割を果たしており、彼の比例はアカデミーの意思をかなり反映していると思われる⁶³⁾。彼の講義録『建築オーダー書』に掲載された柱頭は、各段の高さの大小関係が「第3段>第1段>第2段」という順であるという点で、パンテオンのポーチコの柱頭に類似した比例を示している。この後者の柱頭は高さが $67 \frac{3}{4} P$ しかない。しかしそれを垂直方向に均等に若干引き延ばせば、その各段の比例はデゴデの柱頭のそれに非常に近くなる。唯一の相違点は、パンテオンにおいてはコラム上部直径は $52 \frac{1}{3} P$ であるが、デゴデのコリント式では $50 P$ であることであり、その結果、デゴデの柱頭は左右の幅が小さいものになっている（図5、14、15）。

アカデミーがウィトルウィウスの比例を無視して注目したのはローマのカストル神殿とパンテオン神殿の柱頭の比例であった。アカデミーはかなり躊躇した後、パンテオン神殿の例を選択した。もっとも第3段が最も厚いという点では両者は共通している。

3. 3 第2期における比例

第2期（1734-1750）において、アカデミーは3段の

垂直方向の比例に関してはほとんど議論していない。

しかしタヌヴォーは、それまでアカデミーで提案され議論された比例とはまったく異なるものを提案した。すなわち第1期においては第3段が最も厚くされたが、タヌヴォーは最下段である第1段を最も厚くし、第3段を最も薄くした。彼がなにを根拠にこの比例を思いついたかはアカデミー関係の資料をもってしては不明である(図17~19)。

4. 18世紀の建築作品との比較

18世紀中葉における建築アカデミーの大賞コンクールに提出された作品のなかにはアカデミーの議論を反映したと思われる作品が、いくつか見られる。

古代の実例に従って第3段の高さが最大にされている柱頭の例は、1737年度のローマ大賞に応募したランデ案に見られる(図20)。

タヌヴォーが作図した柱頭のように、第1段の寸法が一番大きい例もいくつか見られる。例えば、1766年度の大賞を獲得したレモン案や、月例賞である「対抗賞 Prix d'émulation」の同1766年5月の受賞案では第1段が明らかに他の2段よりも厚い⁶⁴⁾(図21)。アカデミー主事でもあったアンジュ=ジャック・ガブリエル⁶⁵⁾のいくつかの作品の図版においても第1段が明らかに厚い(図22)。しかし19世紀になると、例えばJ.N.L.デュランは第3段が最も厚いという第1期にアカデミーが承認した比例に戻っている(図23)。従ってアカデミー特有の比例が影響力をもっていたのは18世紀後半だけであったと考えられる⁶⁶⁾。

5. 結論

アカデミーがコリント式柱頭の比例を決定するために採用した根拠を見てゆくと、以上のように、概して古代建築からフランス古典主義へ、という流れは認められる。しかし柱頭固有の問題もあり、細部に注目すればこの枠組みに完全に合致しているわけではない。

柱頭全体の高さに関しては、ウィトルウィウスの与えた小さな値が疑問視され、次にルネサンスの建築書を根拠としたより大きい値が採用されたが、ピラスターの場合が考慮されはじめると、さらに大きい値が与えられた。この最後の場合、ルーヴル宮東コロネードの例が参照されたのは事実であるが、第1期の終わりにすでにその言及は見られる。従って古代建築からフランス古典主義という枠組みがあったとしても、それが第1期と第2期の時代区分に正確に対応しているわけではない。

もっともコラムとピラスターの混用は、ウィトルウィウスもイタリア・ルネサンスの建築家達も、実作品において試みる場合はあっても、特に理論的解決を与えなかった問題であった。アカデミーがはじめてこの問題に本

格的に取り組んだことは指摘されてよいだろう。

アバクスの下部の3段の高さに関しては、ウィトルウィウスや彼に追随したパラディオ等は「第1段=第2段=第3段」という比例を守ったが、アカデミーはむしろ古代の実例に依拠し、第1期では「第3段>第1段>第2段」という比例を是認した。

第2期においてタヌヴォーは、第1期に提案された古代的な比例とは明らかに異なる、「第1>第2>第3」等の、第1段を最も厚くする比例を提案した。ただし彼はその理由を説明するテキストを残していないし、アカデミーも明確な判断を議事録中には残していないので、この比例の起源はただちには判明しない。明らかに古代ではなく、ルネサンスの建築書にも類例がなく、それまでのフランスにおいては前例のない比例である。

この主題に関して残された僅かな資料からは、タヌヴォーはフランス建築の前例に依拠しなかったとしても、少なくとも古代的でもルネサンス的でもない比例を求めたのではないかと推測されるのみである。ただ少なくともアカデミーが異を唱えた形跡はなく、また実際、タヌヴォーの比例に合致する同時代の建築の例もいくつかは見られるので、当時はある程度の有効性はあったものと考えられる。その意味では、結果的にはフランス的な造形となったことは指摘される。

注

P.V. =Procès-Verbaux de l'Académie Royale d'Architecture (王立建築アカデミー議事録)

B.I.F.=Bibliothèque de l'Institut de France (フランス学士院図書館)

- 1) 「アカデミー第1期、第2期」の定義に関しては拙稿『アカデミー第一期(一六七〇~一七〇五年)における建築オーダーの基本比例の歴史的総決算----フランス王立建築アカデミー(一六七〇~一七九三年)におけるオーダー理論の発展過程に関する研究(一)』建築史学第一六号、1991年3月、pp.22-23、参照。
- 2) 前掲拙稿 p.21
- 3) 前掲拙稿、及び拙稿『ドリス式ペー・コラムをめぐる諸問題----フランス王立建築アカデミー(一六七〇~一七九三年)におけるオーダー理論の発展過程に関する研究(三)』建築史学第一九号、1992年9月、pp.54-90、参照。
- 4) 紀元前484年完成。アカデミーやブロンデルらは通常それを、その場所の名にちなんで「カンポ・ヴァッキノ(Campo Vaccino)の3本のコラム」と呼んでいた。
- 5) Claude Perrault, 'Les Dix Livre d'Architecture de Vitruve', 1973, 2ème édition 1684, liv.IV, ch.i, p.108. 森田慶一版では第四書・第二章・第11節に「アバクスをも含めた柱頭の高さは柱の下部の太さと同量である」とある。
- 6) 相川浩訳『アルベルティ建築論』P.204
- 7) Philibert De L'Orme(c.1510-1570)
- 8) Philibert De L'Orme, 'Le Premier Tome de l'Architecture', 1567, liv.VI, ch.III
- 9) Roland Fréart de Chambray(1606-1676)
- 10) Roland Fréart de Chambray, 'Parallele de l'architecture antique et de la moderne', 1650, pp.61, 64-65
- 11) Abraham Bosse(1602-1676); 1648年以降、絵画彫刻アカデミーで透視図法を教える。

- 12) Abraham Bosse, "Traité des manières de dessiner les ordres de l'architecture antique...", 1664; エンタブラチュア/コラムの高さ比が 1/5 であるオーダーを表した図<XXIV>では 71 P 1/2、1/4 であり、それが1/4であるオーダーを表した<fig.F>では 71 P である。
- 13) Claude Perrault(1613-1688)、前掲拙稿 pp.43-44参照。
- 14) op.cit. p.106-107, pl.XXIII; さらに同図版に関するペローの注釈参照。
- 15) Antoine Desgodetz(1653-1728)、アカデミー第2代教授、拙稿『アカデミー第一期(一六七一〜一七五五年)における建築オーダーの基本比例の歴史的総決算---フランス王立建築アカデミー(一六七一〜一七九三年)におけるオーダー理論の発展過程に関する研究(一)』建築史学第六号、1991年3月、p.42 参照。
- 16) P.V., t.I, p.97
- 17) François Blondel(1618-1686)、前掲拙稿 p.41参照。
- 18) François Blondel, "Cours d'Architecture", IInd partie, 1683, liv.I, ch.viii, p.36
- 19) op.cit., liv. V, ch.I, p.107, pl.XIX
- 20) Perrault, "Ordonnance...", p.72; ペローは、1モジュール=1/3×直径、という独特の寸法体系を使っており、それに従えば「3モジュールと1/2」である。
- 21) Jean Bullant(C.1515/1520-1578)
- 22) P.V., t.II, p.254
- 23) P.V., t.II, pp.338-339
- 24) フレアール・ド・シャンブレはその解説で、ドロルムの方が好ましいが、それでも彼は「ゴシックの目で」古代ローマ建築を見ている、としている。Ch. Freart de Chambray, op.cit., pp.80-81
- 25) P.V., t.III, p.247
- 26) P.V., t.III, pp.256-257
- 27) Philippe De La Hire(1640-1718)、前掲拙稿 pp.41-42参照。
- 28) アカデミーは建築オーダーの具体的な比例においてはウィトルウィウスの教義からは次第に離れていったが、彼を名指して直接的に非難した箇所は議事録にはない。そうしたことから、一般的傾向として、アカデミーは古代建築の実例との食い違いがあることは認めながらも、この古代の權威を尊重しようとしたことが推測される。
- 29) P.V., t.II, p.248
- 30) P.V., t.III, p.278
- 31) P.V., t.III, pp.278-279
- 32) P.V., t.III, p.279
- 33) この講義録はアカデミーの学生ピナールによる手稿としてのみ残されており、刊行されたわけではない。フランスの国立図書館版画分室の目録にも発行時期は記されていない。デゴデは1717年にアカデミー教授になり1728年に没しているから、その間であることは確実。
- 34) Antoine Desgodetz, "Traité des ordres d'architecture", Ch.VI, "VII. dessein"
- 35) Michel Tanevot(?-1762); 1730年代と1740年代にアカデミーの指示に基づいて建築オーダーの図面を作成し学会に提出した会員。前掲拙稿 p.44 参照。
- 36) P.V., t.V, pp.277-278
- 37) P.V., t.V, p.278
- 38) 通常このコロネードの作者はクロード・ペローとされるが、彼は『オルドナンス』においては高さ 2 M 1/3 のコリント式柱頭を提案しているので、もし彼が作者であるなら、自説を曲げて設計したことになる。アントワヌ・ピコンは、実施設計はフランソワ・ドルベ (François d'Orbay) が行ったと指摘している。 Cf. Antoine Picon, "Claude Perrault", 1988, p.171
- 39) 前掲拙稿 pp.22-23
- 40) P.V., t.V, p.293
- 41) B.I.F., Ms1026, pl.61,62,78, etc.
- 42) P.V., t.V, pp.328-329
- 43) 1 M=12 P. であるから、 $2P = 2/12 M = 1/6 M$
 $\therefore 2M 1/2 + 2P = 2M + (1/2+1/6) M = 2M 2/3$
- 44) Gabriel-Germain Boffrand(ca.1667-1754)、1709年より第1部会員。
- 45) P.V., t.VI, pp.122-123
- 46) P.V., t.VI, pp.122-123; もっともこの会合では、ヴェルサイユ宮チャペルに見られるコリント式柱頭の高さ 2 M 1/2 という値も「美しい比例」であるとしている。この場合は、アカデミーは単に王室建築にも敬意を表しただけであると考えられる。
 また、議事録という公文書に忠実に従えば、これはピラスターとコラム併用の場合に関する判断と読める。しかしこの時期、柱頭の高さはもっぱらピラスターの文脈においてのみ議論されている。またタヌヴォーの図版を見ると、コラム単独の場合でも 2M1/3 よりも大きい 2M 1/2 という値を与えていることもあり、実質的にはコリント式柱頭全般を対象とするものであったとも考えられる。
- 47) 単数形は<caulicole>だが、通常は複数形で使われる。"Vocabulaire de l'architecture" (1972)によれば、アバクスを直接支える渦巻き飾りのすぐ下の葉状飾りを意味するとされる。ペロー訳『ウィトルウィウス建築十書』では「そこから他の葉が延びている」(p.109)とあるので「葉」ではなく「茎」を意味していることは明らかで、ペローは脚注において、「細い茎(tige)を意味する」とし、同時に、ウィトルウィウスはその下の葉状飾りなどを含めて <caulicole>としている、と説明している。パラディオにおけるこの言葉の意味としては、桐敷真次郎編著『パラディオ「建築四書」注解』p.95 及び、桐敷真次郎『コリント式柱頭のカウリクルスについて』日本建築学会関東支部研究報告集、1983、参照。
- 48) Perrault, op.cit., p.109; 森田慶一版では、この部分は「アバクスの厚さを除いて、残りは三部分に分かれた、そのうちの一部分がいちばん下の葉に与えられる。次の葉はまん中の高さを占める。茎も同じ高さをとり、この茎から葉が出張って生える---この葉が、茎から出て(アバクスの)後の先までいっている渦巻きを受けるように。」と訳されている。
- 49) 相川浩、前掲書 p.204
- 50) Philibert De L'Orme, op.cit., liv. VI, ch.IV, VI, VIII
- 51) Fréart de Chambray, op.cit., p.65
- 52) A.Bosse, op.cit., pl.XXIV, fig.F: pl.XXIV では下部から<21、21、21、9 1/2>、fig.F では<20 1/2、20 1/2、20 1/2、9 1/2>であり、特に前者の図では、下部3段の「高さ全体は3等分されるべきである」とされている。
- 53) P.V. t.II, p.267; Philibert De L'Orme, "Le Premier Tome de l'Architecture", liv.VI, ch.I-II、を講読した上での判断。
- 54) Blondel, op.cit., Ière partie, liv.V, ch.I, pl.XVII
- 55) P.V., t.II, p.158
- 56) P.V., t.II, pp.182-183
- 57) P.V., t.II, p.248
- 58) P.V., t.II, p.255
- 59) P.V., t.III, p.59
- 60) La Hire, "Architecture Civile", p.91
- 61) op.cit., p.93
- 62) P.V., t.III, p.125
- 63) 前掲拙稿 p.42
- 64) Jean-Marie Pérouse de Montclos, "Les Prix de Rome --- Concours de l'Académie Royale d'Architecture au XVIIIe siècle", 1984, pp.82, 86-87
- 65) Ange-Jacques Gabriel(1698-1782); 1728年よりアカデミー会員。1742年より王室首席建築家兼アカデミー主事。
- 66) 本論の目的は建築アカデミー内の議論の骨格を明確にすることによって、残念ながら、一般建築界へのその影響を体系的に明らかにするには別稿を用意しなければならない。従ってここでは、少なくともこうした影響が存在した2〜3の例を示し、仮説を提出するに留める。

(1994年8月25日原稿受理、1995年2月1日採用決定)